

Title	李太白詩・杜工部詩集の玉几山人・許自昌校本について
Sub Title	
Author	小見山, 春生(Komiyama, Haruo)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1983
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.20 (1983.) ,p.419- 429
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000020-0419

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

李太白詩・杜工部詩集の玉几山人・許自昌校本について

小見山 春生

盛唐を代表する李白と杜甫の二大詩人の全集は、宋代以降多数刊行されてきた。

今に伝存する版本に限っても、李白には宋版に『李太白文集』三〇卷（静嘉堂文庫蔵二冊）、『李翰林集』（南京図書館蔵存二四卷）、元版に『唐翰林李太白詩集』二六卷（成賢堂文庫旧蔵三冊）お茶の水図書館現蔵^{存一七卷}五冊）と『分類補註李太白詩』二五卷（一・二行二〇字本）（龍谷大学図書館蔵一三冊・宮内庁書陵部蔵一三冊・静嘉堂文庫蔵二冊・同蔵^{存八卷}五冊）国立中央図書館蔵^{存一二卷}八冊・北京図書館蔵八冊・同蔵一六冊・上海図書館蔵・南京図書館蔵二冊）等がある。後者のみ行格を記したのは、それが至大三（一三三〇）年に建安余氏勤有堂で刊刻されたものであり、明代にも覆刻されており、その伝存本も必ずしも少なくないからである（阿部隆一氏『訂中国訪書志』一三三・五四六頁、等）。

また杜甫には、宋版に『杜工部集』二〇卷補遺一卷（上海図書館蔵^{存八卷}又三葉）、『門類増広十註杜工部詩』二五卷（北京図書館蔵

^{存六卷}六冊）、『分門集註杜工部詩』二五卷年譜一卷（北京図書館蔵二八冊）、『杜工部草堂詩箋』五〇卷（北京図書館蔵^{存三九卷}一四冊・^{存二六卷}七冊）、『新刊校定集注杜詩』三六卷（静嘉堂文庫蔵^{存六卷}三冊）、『黄氏補千家集注杜工部詩史』三七卷（国立中央図書館蔵^{存九卷}八冊）同三六卷（北京図書館蔵二〇冊）がある。さらに元版には、『杜工部草堂詩箋』四〇卷外集一卷詩史補遺一〇卷年譜二卷伝序碑銘一卷詩話二卷（内閣文庫蔵一〇冊・国立中央図書館蔵^{存九卷}四冊）上海図書館蔵）、『黄氏補千家註紀年杜工部詩史』三六卷年譜弁疑一卷（北京図書館蔵^{存三五卷}一二冊）、『集千家註批点杜工部詩集』二〇卷（上海図書館蔵）、及び『集千家註分類杜工部詩』二五卷（一・二行二〇字本）（国立中央図書館蔵二四冊・同蔵一六冊・同蔵^{存文集二卷}三冊）がある。この『集千家註分類杜工部詩』は皇慶元（一三三二）年、建安余氏勤有堂で刊刻され、又、至正八（一三四八）年に積慶堂でその覆刻本が刊行され、その覆刻本は後に広勤書堂で求版・印行されている（『訂中国訪書志』二七一〜三・

五四八〜九・六四五〜六・六五八頁、等)。

明代では、新たに編次されて刊刻された万曆間平原劉氏合刻の『李翰林分体全集』四二卷・『杜工部全集』六六卷、および万曆二〇(一五九二)年刊の『刻杜少陵先生詩分類集註』二三卷以外はテキストとしては宋・元版と同系本であり、李白には『李翰林集』三〇卷、玉几山人校刊および許自昌校刊の『分類補註李太白詩』二五卷、郭雲鵬校刊の『分類補註李太白詩』三〇卷(詩二五卷雜文五卷)等があり、杜甫には玉几山人校刊および許自昌校刊の『集千家註杜工部詩集』二〇卷文集二卷等がある。李白の全集の内、『李翰林集』は国立中央図書館、北京図書館と静嘉堂文庫に各々一部ずつ所蔵されているだけで、『分類補註李太白詩』の現存部数の多さには遠く及ばない。したがって明代の代表的な李白・杜甫の全集としては『分類補註李太白詩』と『集千家註杜工部詩集』とを挙げるができる。なお清代に至ると、康熙五六年に繆曰芑の刊行した『李太白文集』三〇卷(その序によれば覆宋刊本であるという)を除いては、それ以前と異なるテキストの全集本や注釈本等が相当数刊刻されている。

筆者は現在、漢籍に関する共同研究の一環として集部唐人別集明清刊本の書誌調査を進めている。この調査結果の総目録はいずれ発表される予定であるが、調査の過程で若干の知見が得られた。本稿では玉几山人および許自昌校刊の李白・杜甫の全集本に限ってということであるが、以下に記述してみたい。

明代の代表的な李杜の全集本としては、前述のように玉几山人および許自昌校刻の『分類補註李太白詩』・『集千家註杜工部詩集』、さらに郭雲鵬校刻の『分類補註李太白詩』三〇卷(詩二五卷雜文五卷)が挙げられる。

玉几山人校刻の『分類補註李太白詩』二五卷は嘉靖二五(一五四六)年刊、『集千家註杜工部詩集』二〇卷文集二卷附録一卷は嘉靖一五(一五三六)年刊で、後述のように版式および字様ともに全く同一である。両者の刊行に一〇年の間隔はあるが、刊行者が一对のものとして意図したことは明らかであり、広義の合刻本と言えないこともない。

許自昌校刻の『分類補註李太白詩』二五卷は万曆三〇(一六〇二)年序刊で、『集千家註杜工部詩集』二〇卷文集二卷は刊年を明らかにしないが、『李太白詩』の序の首題に「合刻李杜全集序」とあって、両者が合刻本であることを示している。勿論、この李杜全集も後述のように版式および字様ともに同一である。

元代において、李杜全集は勤有堂以来の『分類補註李太白詩』と『集千家註分類杜工部詩』とが合刻といつてよい形式をとったであろうと思われるのに対し、明代の李杜全集は『分類補註李太白詩』と『集千家註杜工部詩集』との合刻に変化したことになる。

又、郭雲鵬校刻の『分類補註李太白詩』三〇卷は嘉靖二二(一五四三)年刊で、楊守敬によれば郭雲鵬が雜文五卷を新たに編次して詩二五卷に合わせ、通卷三〇卷としたものである(『訂中

『国訪書志』一三三頁所引の楊守敬の手書題跋参照)。

これらの李杜全集本を元版と或は相互に比較した場合、テキスト上の相違はどうか。

台北の国立故宮博物院に所蔵されている楊氏觀海堂旧蔵本中に玉几山人校刊の『分類補註李太白詩』があり、その首に楊守敬の手書題識が附されている。

此本為明嘉靖丙午玉几山人校刊卷首有重刊序後于郭雲鵬刊本三板式与郭本／同而注文但略有刪節不如郭本之甚亦僅有詩二十五／卷不刻雜文後來許自昌刊本即從此本出也(『訂増中国訪書志』一三四頁)

つまり、元版の『分類補註李太白詩』に比し、明版の郭雲鵬校刊本と玉几山人校刊本ともに注文の節略が見られるが、後者では注文末の数字或は一〇数字を削去する場合が間々見られるだけであるのに対し、前者においてその削略が甚だしいのである。その上、前者には新たに徐禎卿の注が増補されている。したがって、玉几山人校刊本は元版以来のテキストを大体忠実に継承していると言えよう。

玉几山人校刊の『集千家註杜工部詩集』はテキストとしては元版の『集千家註批点杜工部詩集』二〇卷文集二卷年譜一卷附録一卷を継承しており、管見の限りでは本文はもとより注文中においても相違は見られない。

また許自昌校刊の李杜全集は玉几山人校刊本とテキスト上の相違は見られない。

なお、以下の記述に李Ⅰ 李Ⅱ のようにあるのは 同版の中

で刊印修の別を示すものであり、したがって、合刻本としては李Ⅰ 杜Ⅰ が対応する方式となる。そのため 杜Ⅱ がないような場合が生じるのである。

一 玉几山人校本

(1) 嘉靖原刊本

李Ⅰ 分類補註李太白詩 二五卷唐翰林李太白年譜一卷 唐李

白撰 宋楊齊賢集注 元蕭士贇補注 (年譜) 明薛仲宣編

明玉几山人校 明嘉靖二五年刊(校者自刊)

内閣文庫蔵(大一二冊)・東洋文庫蔵(特大一〇冊)・宮内庁書陵部蔵(大一二冊)。

又、書目によれば国立中央図書館蔵(三二冊)・中央研究院歴史語言研究所蔵(二四冊)・北京図書館蔵(三〇冊・二二冊)がある(すべて未調査)。

首に唐翰林李太白詩序、樂史後序、唐翰林李君碣記、宋敏求後序、曾鞏序、毛漸序、序例、唐翰林李太白年譜、分類補註李太白詩目録。本文首に「分類補註李太白詩卷之一」と題し、第二・三・四行に「格(低一)古賦八首(二字空格)春陵楊齊賢子見集註格(低七)章貢蕭士贇粹可補註格(低五)大明嘉靖丙午玉几山人校刻」と続け、次行より本文に入る。四周双辺(二一・六×一三・〇_七)有界、每半葉八行、行一七字、注小字双行。版心白口双白魚尾、中縫に「李集卷幾(丁付)(刻工名)」。

版心の刻工名は李杜の両集に共通するものが殆どである。両集所刻の刻工名をすべて挙げれば次のようになる。

下云 化 仲 何 信 先 刘〔劉〕 匆(勿) 周 唐

啓明(啓、后) 天 天宿 天錫 子仁(仁、仔、子)

安 宗 宣 廷 思 恩 惠 恩 昂 曰 曾 朝 李 鳳

(李、鳳、鳳) 東 林甫(甫) 正 江 濟(齊) 澄 潘

王 田 章 羊 美 叶〔葉〕 袁 袁 陸 敖 陽 雇 馬

李 II 又 〔明後期〕修(六經堂)

内閣文庫藏(大一四冊)・東洋文庫藏(大一二冊)・斯道文庫

藏(大一二冊)・台北国立故宫博物院藏(一二冊^{楊氏觀海}堂旧藏)。

本修補本は封面を有し、それには「許玄祐先生評訂／李太白

全集／内集千家註 六經堂梓」と題す。首に重刻唐翰林李太白

詩集序、唐翰林李太白詩序、序例、唐翰林李太白年譜、分類補

註李太白詩目錄を附す。重刻唐翰林李太白詩集序は原刻本の既

調査のものいずれにも見られず、恐らく「六經堂梓」を称す

るこの本に至って初めて加えられたと思われる。ただ、その序

には撰者名がなく、又、その内容からも重刻の具体的な事情は

知り得ない。

本修補本は後述のようにさまざまの問題を含むが、原刻本の

三部には全く見られなかった「重刻唐翰林李太白詩集序」が加

えられたように補修本である。ただし、補刻は筆者の調査の限

りでは三〇数丁で、甚だしいものではない。しかし、印面は磨

滅が相当に進んでおり、原刻葉の一部を入木によって修補した

ところも少なくない。補刻の丁付を示せば次のようである(漢

数字は巻次、算用数字は丁付を表わす)。

一—1 2 23、二—35 36 79、三—29 58、五—25、九—1 2、

一〇—18、一二—3 12 27、一三—11 12、一四—5 6 11 12、

一六—7 8、一七—3 4、一八—5 6 11 14、一九—2、

二〇—5、二二—7 8、二四—17。なお、補刻葉には間

々、版心が白口単白魚尾のものが混じっている。

本修補本は前記のように巻一初葉が補刻葉であるが、その本

文首第四行は「^(低五)大明嘉靖丙午玉几山人校」とあって、原刻

本での末字の「刻」が削除されている。原刻本では既調査の三

部すべてに見られなかった封面には「六經堂梓」との印行者名

と「許玄祐先生評定」の文字が加えられている。玉几山人と六

經堂、封面の許玄祐先生即ち許自昌との相互の関係が不明であ

るため断定はできないが、これらのことは、六經堂という書肆

への版木の移動というようなことと、何らかの関係があるのか

も知れない。

李 III 又 至〔明末〕通修(六經堂)

斯道文庫藏(大一六冊)。

封面は前記李 II の六經堂印本のもと同版である。

補刻葉の新たに加えられたものは数が多く、李 II で指摘した

補刻丁数をかなり上回るほどである。新たに加わった補刻丁を

示せば次のようである。

年譜—1。目錄—18 25。一—9 10 14 21 23 24 26 29 34 43

44 53 59 64 65 69 73、二—1 2 5 15 17 21 28 29 31 32 45 48 59 60

77、三—15 26 51 61、四—45 50、五—11 12 18 26 36、六—13 19

35 36、七—12 24 25、八—15、九—12 27、一〇—17 35、一一

—19 41、一二—5 6、一七—9、一八—8 22 24(8は誤

って原刻葉の18を補刻したもの、二四—17。

補刻葉に間々、白口双黒魚尾のものが混じる。年譜の1のみは白口単黒魚尾である。

ここで、封面の意味についても考えてみたい。本通修本および前記の第一次修本は共に玉几山人校の原刻本の補刻本であるが、なぜ許自昌の名が封面に刻されているのであろうか。許自昌校の李太白詩に、たとえそれが原刻本ではなくても封面に校定者として許自昌の名があるのは理解できる（後述の許自昌校本の②覆万曆刊本の李II参照）。それでは本版の修補本の場合はどうであらうか。

筆者は、断定はできないけれども、第一次修本印行の段階で既に本版の印面が磨滅しており、本文の校勘を踏まえた修補が必要になっていったこと、およびその修補の際に重刻唐翰林李太白詩集序が新補されたと思われることから推して、その時に許自昌によって校訂が加えられたと推測できはしないかと思うのである。更に、本版に加えられた補刻が、その字様などから万曆を中心とした明後期に推定できるとすれば、その推測もあり得ないことではないと思う。とすれば、許自昌校本が玉几山人校本を直接継承する形で万曆年間に刊行されたことも、より自然に理解されるのではないであらうか。

杜I 集千家註杜工部詩集 二〇卷文集二卷附録一卷 唐杜甫撰 元高楚芳編 明玉几山人校 明嘉靖一五年刊（校者自刊）

内閣文庫蔵（大一二冊・大二三冊）・東洋文庫蔵（大二四冊）

宮内庁書陵部蔵（大二〇冊・大二三冊）。内閣文庫蔵本は二部あるわけであるが、『内閣文庫漢籍分類目録』には、その内の一は別集ではなく総集類に『分類補註李太白詩』とともに「李杜全集」二四冊として著録されている。

又、国立中央図書館蔵（二四冊・一二冊・一六冊・一〇冊）北京図書館蔵（八冊）。

首に杜工部詩史旧集序、杜工部詩後集序、成都草堂詩碑序、杜工部草堂詩箋跋、集千家註杜工部詩集目錄。本文首に「集千家註杜工部詩集卷之一」（低五格）大明嘉靖丙申玉几山人校刻」と題し、次行より本文に入る。四周双辺（二一・七×一三・一）有界、每半葉八行、行一七字、注小字双行。版心白口双白魚尾、中縫に「杜集卷幾（丁付）（刻工名）」。刻工名は殆ど李太白詩と共通で、所刻の刻工名はすべて前掲の通りである。

文集は首に集千家註杜工部文集目錄を、卷末に集千家註杜工部詩集附録を附す。本文首に「杜工部文集卷之一」と題し、次行より本文に入る。每半葉八行、行一七字。中縫に「杜文卷幾（丁付）（刻工名）」。

なお、李II・IIIに対応する杜工部詩集の補刻本は現在までのところ未発見であり、次は杜IVに至る。

杜IV 又 〔明玉几山人校〕 明嘉靖一五年刊〔明後期〕修（明易山人）

尊経閣文庫蔵（大一一五冊）。

書目によれば、国立中央図書館蔵（二四冊・二〇冊・一二冊）

中央研究院歴史語言研究所蔵（一二冊）・北京図書館蔵（一二

冊)・上海図書館蔵。

尊経閣文庫蔵本は、本文首に「集千家註杜工部詩集卷之一／
(低五) 大明嘉靖丙申明易山人校刻」と題し、次行より本文に入る。

本版は玉几山人校刊の『集千家註杜工部詩集』(杜I)と同版で、わずかに本文首第二行の「玉几」とあるべきところに埋め木し、「明易」と改められていることだけが異なる。印面に甚だしい磨滅は認められないから、それほどその後印本とも思われない。ただ、玉几山人と明易山人の関係については不明であり、刊行者が変わったものか、なぜ二字だけを埋め木としたのか解し難い。以上のように、本版は明易山人校本と言うよりは、玉几を明易とした二字に関してだけであるが、一応、補刻本とみなすのが隠当であろう。

(2) 覆嘉靖刊本

現在までに明らかにになった範囲では、覆刻本は杜工部詩集に一種あり、李太白詩については、見当たらない。

杜 集千家註杜工部詩集 二〇卷 唐杜甫撰 元高楚芳編
〔明玉几山人校〕〔明後期〕刊 覆明嘉靖一五年刊本

内閣文庫蔵(大10冊)。

首に杜工部詩史旧集序、杜工部詩後集序、成都草堂詩碑序、杜工部草堂詩箋跋、集千家註杜工部詩集目錄。本文首に「集千家註杜工部詩集卷之一」と題し、一行を隔てて本文に入る。即ち、本文首第二行目にあるべき「大明嘉靖丙申玉几山人校刻」の一二字が削除されているわけである。左右双辺(二一・五×一三・〇センチ)有界、稀に四周双辺の丁を混じえ、每半葉八行、

行一七字、注小字双行。版心白口双白魚尾、中縫に「杜集卷幾(丁付)」。玉几山人校刊原刻本のかかなり忠実な覆刻である。

内閣文庫蔵本には文集と附録とが共にならないほか、卷一八だけは嘉靖一五年玉几山人校刊の原刻本であり、他の巻と料紙を異にしてもいるので、この巻のみ補配されたものと思われる。

二 許自昌校本

(1) 万曆原刊本

李I 分類補註李太白詩 二五卷唐翰林李太白年譜一卷 唐李白撰 宋楊齊賢集注 元蕭士贇補注 (年譜)明薛仲邕編
明許自昌校 明万曆三〇年序刊(校者自刊)

東洋文庫蔵(大八冊)・京都大学文学部蔵(大一二冊)。東洋文庫蔵本は合刻李杜詩集序を欠く。

ほかに国立中央図書館蔵(八冊・六冊)・上海図書館蔵。

首に唐翰林李太白詩序等、合刻李杜詩集序(明王稚登撰)、刻李杜全集小引(明許自昌撰)、唐翰林李太白年譜、分類補註李太白詩目錄。本文首に「分類補註李太白詩卷之一／(低九) 春陵楊齊賢子見集註／(低九) 章貢蕭士贇粹可補註／(低八) 明長洲許自昌玄祐甫校」と題し、次行より本文に入る。左右双辺(二一・七×一三・八センチ)有界、每半葉九行、行二〇字、注小字双行。版心白口单黒魚尾、中縫に「李詩補註 卷幾(丁付)(大小字数)」。合刻李杜詩集序および刻李杜全集小引は共に万曆三〇年の年記を有し、この両序があることから杜甫の全集本も万曆三〇年頃に合刻されたことがわかる。

本版には多数の墨釘が見られる。恐らく、本版が次掲の李Ⅱとの関係から推して、草卒の間に刊刻されたための結果であろうと思われる。

李Ⅱ 又 「明万曆末」修

東洋文庫蔵(大五冊)・宮内庁書陵部蔵(大六冊)・東京大学総合図書館蔵(大二〇冊)。

首は前記李Ⅰ(原刻本)と同じ。

本補刻本は原刻本に見られた多数の墨釘が埋め木によって殆ど修補されている。印面は清爽であり、原刻本とあまり隔たらない時期の補刻と思われる。

杜Ⅰ 集千家註杜工部詩集 二〇卷文集二卷 唐杜甫撰 元高楚芳編 明許自昌校 「明万曆三〇年序」刊(校者自刊)

東洋文庫蔵(大五冊)・静嘉堂文庫蔵(大六冊)・東京都立中央図書館蔵(大一〇冊)・東京大学総合図書館蔵(大二〇冊)。

東大総合図書館蔵本は李Ⅱの同図書館蔵本と同一の函架番号を附して所蔵されている。

又、国立中央図書館蔵(八冊・六冊・一六冊)・上海図書館蔵。

首に杜工部詩史旧集序、集千家註杜工部詩集目錄、集千家註杜工部文集目錄。本文首に「集千家註杜工部詩集卷之一」(格低八)

明長洲許自昌玄祐甫校」と題し、次行より本文に入る。左右双辺(二一・八×一三・九^セ)有界、每半葉九行、行二〇字、注小字双行。版心白口單黒魚尾、中縫に「杜詩集註 卷幾(丁付)(大小字数)」。

文集は、本文首に「杜工部文集卷之一」(格低八)明長洲許自昌玄祐甫校」と題し、次行より本文に入る。每半葉九行、行二〇字。中縫に「杜工部文集 卷幾(丁付)」。

墨釘は甚だ少ない。本版が李Ⅰと殆ど隔たらない時期に刊刻されたのなら、李Ⅰにおいて多数見られた墨釘が本版ではごく少ないという理由はやや解し難い。或は本版以前に、李Ⅰに対応するほどの墨釘の多い版本があったとすれば、本版はその補刻本に当たるといふことも考えられないことはない。だが、現在までに調査した限りではその条件に適う版本が未発見であるので、本版を一応、李Ⅰに対応する杜工部詩集の原刻本杜Ⅰと見なしておくこととする。

なお、前記李Ⅱに対応する杜Ⅱは現在までのところでは未発見である。

(2)覆万曆刊本(第一種)

李Ⅰ 分類補註李太白詩 二五卷唐翰林李太白年譜一卷 唐李白撰 宋楊齊賢集注 元蕭士贇補注(年譜)明薛仲邕編 明許自昌校 「明後期」刊(聚奎樓蔵版) 覆明万曆三〇年序刊本

内閣文庫蔵(大六冊)。本帙は刻李杜全集小引と序例とを補写している。

封面は「重訂正合刻」聚奎樓蔵版／李杜詩全集」。首に合刻李杜詩集序(明王稚登撰)、唐翰林李太白詩序等、分類補註李太白詩目錄、唐翰林李太白年譜。本文首に「分類補註李太白詩卷之一」(格低九)春陵楊齊賢子見集註(格低九)章貢蕭士贇粹可補

註／(低八格)明長洲許自昌玄祐甫校」と題し、次行より本文に入る。左右双辺(二二・二二×一三・九形)有界、每半葉九行、行二〇字、注小字双行。版心白口単黒魚尾、中縫に「李詩補註 巻幾(丁付)」。稀に大小字数或は刻工名を版心に付刻する。

刊行者である聚奎樓については今のところ不明であり、許自昌との関係もわからない。

本版の字様は比較的端整ではあるが、原刻本と比較すれば、字画が不整であることは明らかである。

なお、本版に対応する杜工部詩集、杜Iは未発見である。

李II 又 [明後期]印(書林汪復初蔵版)

斯道文庫蔵(大八冊)・東京大学東洋文化研究所蔵(大二四冊)。

封面は「許玄祐先生較／李杜全集／書林汪復初蔵版」。

首は前記李Iと同じ。

本後印本は補刻の施された形跡はなく、又李Iに比し、印面の磨滅もあまり甚だしくはなっていないことから、李Iの刊行からあまり隔たらない時期の印行と思われる。なお、封面に見られるように、この段階で刊行者名が聚奎樓から汪復初に変わっているわけであるが、相互の関係については現在のところでは不明である。

李III 又 [明末]修(古呉汪復初)

静嘉堂文庫蔵(大一二冊)。

封面は「許玄祐先生評訂／李太白全集／内集千家註 古呉汪復初梓」。首に唐翰林李太白詩序等、唐翰林李太白年譜、分類

補註李太白詩目録。本覆刻本の最初の聚奎樓蔵版本(前記李I)にあった合刻李杜詩集序がない。単に欠落しただけなのか、或は本帙印行の段階で李太白詩を単行本として出版するため取りはずされたものか、明らかではない。

補刻葉は四周単辺或は左右双辺で字様がやや拙劣であり、丁数は少ない。その丁付は次のようである。

一—15 16 19 20、二—3 4、五—13 14、二二—13 14。

なお、本版に対応する杜工部詩集、杜IIIに当たるものは現在までのところでは未発見である。

李IV 又 至[清後期]通修(雲林五雲堂蔵版)

東洋文庫蔵(大一二冊)・東京都立中央図書館蔵(大一一〇冊)。

封面は「許玄祐先生較／李杜全集／雲林五雲堂蔵版」。

首に合刻李杜詩集序、唐翰林李太白詩序等、唐翰林李太白年譜、分類補註李太白詩目録。刊行者の雲林五雲堂については不明である。又、都立中央図書館蔵本には封面および合刻李杜詩集序・唐翰林李太白詩序等がないが、補刻葉の丁付から本修補本と推定した。

本修補本で新たに加えられた補刻葉は版式・字様の相違によって三種に分けられる。①は左右双辺で、字様は原刻葉に類似するが、やや生硬である。

唐翰林李太白詩序等—3 4。一—7 8 17 18、二—41 42 53 54、

三—21 22 43 44、五—33 35、六—1 29 30、七—13 14 23 24 33

34、八—1 2、九—1 2、一二—15 16、一五—23 24、二四—3 4。

②は四周単辺で、字様が極めて拙劣である。

二―34。

③は四周単辺で、字様が清後期の版本のものに類似する。

五―910。

杜Ⅱ 集千家註杜工部詩集 二〇卷文集二卷 唐杜甫撰 元高楚芳編 明許自昌校 「明後期」刊「後印」(書林汪復初蔵版) 覆「明万曆三〇年序」刊本

斯道文庫蔵(大八冊)。

前述のように、本覆刻本の李太白詩李Ⅰに対応する杜工部詩集杜Ⅰが見当たらないため、杜工部詩集は杜Ⅱが最初である。更に杜Ⅲに該当するものも発見できず、杜Ⅱの次は杜Ⅳになる。

首に杜工部詩史旧集序、集千家註杜工部詩集目錄、集千家註杜工部文集目錄。本文首に「集千家註杜工部詩集卷之一」(格^{低八})明長洲許自昌玄祐甫校」と題し、次行より本文に入る。四周単辺(二一・二×一三・七^{セシ})有界、時に左右双辺を混じえ、每半葉九行、行二〇字、注小字双行。版心白口單黒魚尾、中縫に「杜詩集註 卷幾(丁付)」。

本版はこの期の覆刻本の李太白詩のⅠと字様が酷似しており、ほぼ同時期の刊刻ではないかと思われる。ただ、本帙は印面から見て早印とは思われず、又、本帙と同じ斯道文庫蔵本の李太白詩(前記李Ⅱ)と比較し、印面の状態から共に印年が近接していると認められるので、本帙を李Ⅱと同じく書林汪復初蔵版本と推定しておくこととする。

杜Ⅳ 又 「清後期」修(雲林五雲堂蔵版)

東洋文庫蔵(大一二冊)。

首は前記杜Ⅱと同じ。

本修補本には杜Ⅱに見られなかった補刻葉が約三〇丁あり、その丁付は次のようである。

一―17 18、二―24 25、三―3 6 9 10、四―1 4 25 26、五―15 16、七―5 6、九―29 30、一二―21 24、一四―27 28。文集二―24 26。

本修本の補刻の時期は字様から見て清後期と推定した。又、本帙は李太白詩の前記李Ⅳの東洋文庫蔵本と同じ函架番号を附して所蔵されており、本帙も李Ⅳと同様、雲林五雲堂蔵版本と推定される。

(3)覆万曆刊本(第二種)

李 分類補註李太白詩 二五卷唐翰林李太白年譜一卷 唐李白撰 宋楊齊賢集注 元蕭士贇補注(年譜)明薛仲篁編 明許自昌校 「明末」刊 覆明万曆三〇年序刊本 宮内庁書陵部蔵(大一一〇冊)。

首に唐翰林李太白詩序等、唐翰林李太白年譜、分類補註李太白詩目錄。本文首に「分類補註李太白詩卷之一」(格^{低九})春陵楊齊賢子見集註(格^{低九})章貢蕭士贇粹可補註(格^{低八})明長洲許自昌玄祐甫校」と題し、次行より本文に入る。左右双辺(二一・五×一三・八^{セシ})有界、每半葉九行、行二〇字、注小字双行。版心白口單黒魚尾、中縫に「李詩補註 卷幾(丁付)」。本帙には合刻李杜詩集序・刻李杜全集小引が共にない。

本版は前記覆刻本第一種の李太白詩に比し、字様がより不整である。

本版に対応する杜工部詩集は未発見である。更に、以下に記す(4)、(5)の覆刻本も現在のところそれぞれ李白或は杜甫のいずれかの版本しか発見していない。なお、本版に関連して、和刻本の項参照。

(4) 覆万曆刊本(第三種)

杜I 集千家註杜工部詩集 二〇卷文集二卷 唐杜甫撰 元高

楚芳編 明許自昌校 [明末] 刊 覆 [明万曆三〇年序]

刊本

内閣文庫蔵(大六冊)・静嘉堂文庫蔵(大一一冊・大六冊)・東京都立中央図書館蔵(大一一冊)。

首に杜工部詩史旧集序、集千家註杜工部詩集目錄、集千家註杜工部文集目錄。本文首に「集千家註杜工部詩集卷之一」(格低八)明長洲許自昌玄祐甫校」と題し、次行より本文に入る。四周単辺(二一・五×一三・八_テ)有界、時に左右双辺を混じえ、每半葉九行、行二〇字、注小字双行。版心白口単黒魚尾、中縫に「杜詩集註 卷幾(丁付)」。時に大小字数を付刻する。

本覆刻本は覆刻本第一種の杜工部詩集に比し、字様が明らかに拙劣で、彫版が拙速の中に成ったような印象を受ける。

杜II 又 [清中期] 修

京都大学人文科学研究所蔵(大一一〇冊)。本帙は文集二巻がない。

首に杜工部詩史旧集序等、集千家註杜工部詩集目錄を付し、

文集目錄はない。

本版は印面が漫漶甚だしく、補刻葉も多く見られる。

(5) 覆万曆刊本(第四種)

杜 集千家註杜工部詩集 二〇卷文集二卷 唐杜甫撰 元高

楚芳編 明許自昌校 [明末] 刊 覆 [明万曆三〇年序]

刊本

東京大学総合図書館蔵(大八冊)。

首に杜工部詩史旧集序等、集千家註杜工部詩集目錄、集千家註杜工部文集目錄。本文首に「集千家註杜工部詩集卷之一」(格低八)明長洲許自昌玄祐甫校」と題し、次行より本文に入る。

四周単辺(二一・五×一三・九_テ)有界、時に左右双辺を混じえ、每半葉九行、行二〇字、注小字双行。版心白口単黒魚尾、中縫に「杜詩集註 卷幾(丁付)」。

本版は前記(4)の覆刻本の杜工部詩集に字様が類似するが、より生硬な印象を与える。

(6) 和刻本 覆 [明末] 刊本

李 分類補註李太白詩 二五卷唐翰林李太白年譜一卷 唐李

白撰 宋楊齊賢集注 元蕭士贇補注 (年譜) 明薛仲豈編

明許自昌校 山脇 [道円] (重頭) 校点 延宝七年刊 覆

[明末] 刊本

内閣文庫蔵(大一一冊・大一一冊)・東洋文庫蔵(大一二冊)・

宮内庁書陵部蔵(大二〇冊・大一二冊)・静嘉堂文庫蔵(大二〇冊)・東京都立中央図書館蔵(大一二冊)・慶應義塾図書館蔵

(大一九冊)・同蔵(大_欠卷五)・同蔵(存四卷)・斯道文庫蔵(大一二

冊）・早稲田大学附属図書館蔵(大一二冊)。

首に序例、唐翰林李太白詩序等、唐翰林李太白年譜、分類補註李太白詩目錄。本文首に「分類補註李太白詩卷之一」(格^{低九})春陵楊齊賢子見集註(格^{低九})章貢蕭士贇粹可補註(格^{低八})明長洲許自昌玄祐甫校」と題し、次行より本文に入る。四周単辺(二二・四×一三・九^七)無界、每半葉九行、行二〇字、注小字双行。返り点・送りがな・縦点付刻。版心白口単黒魚尾、中縫に「李詩補註 卷幾(丁付)」。卷二五末葉表の本文の後に「山脇重頭校点」、末葉裏に「延宝七^{己未}三月吉辰^{開板}」と刊記を刻す。

本版は許自昌校の李太白詩を覆刻した(序例だけは覆刻ではない)ことは明らかであるが、原刻本そのものの覆刻ではなく、匡郭の大きさがほぼ一致すること、および字様の特徴が酷似することから推して、前記の(3)覆万曆刊本(第二種)の覆刻であろうと思う。

李太白詩と対になる杜工部詩集は遂に覆刻されなかった。杜甫の全集本としては延宝七(一六七九)年以前、既に明曆二(一六五六)年の跋を付した『刻杜少陵先生詩分類集註』二三卷首一卷(明邵宝撰 過棟參箋 鶴飼「石齋」点)が明万曆二〇(一五九二)年刊本を覆刻して刊行されていた。

註

(1) 『訂中国訪書志』一三四―五頁。同書では明嘉靖二五年刊の原刻本とされているが、本文卷首第四行が(格^{低五})大明嘉靖丙午玉几山人校」とあることから、本修補本と見なした。(2) なお、『国立中央図書館善本書目 増訂本』に次のようにある。

集千家註杜詩二十卷十二冊 唐杜甫撰 元高楚芳編 明嘉靖間刊八行本

書名がやや異なるのが気になるが、もし同版とすると、やはり文集・附録が共にないことに何らかの意味があるのかも知れない。

付記 本稿は、昭和五三―五五年度トヨタ財団の助成による共同研究「国書並漢籍総目録の編纂―その緒業としての部門別目録」の内、筆者が担当した集部別集類唐人別集明清刊本の調査報告の一部である。財団および貴重な蔵書の閲覧に便宜をお計らい下さった各位の御厚意に対し、末筆ながら御礼申し上げる次第である。